



TITLE:

我國經濟發達の特質に就て

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

CITATION:

堀江, 保藏. 我國經濟發達の特質に就て. 經濟論叢 1941, 52(1): 52-65

ISSUE DATE:

1941-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131493>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第一號

昭和十六年一月

論 叢

國家科學としての經濟學……………經濟學博士 谷口吉彦

林子平とその經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

調査における統計の役割……………經濟學博士 蜷川虎三

我國經濟發達の特質に就て……………經濟學士 堀江保藏

公庫制の生成機縁……………經濟學士 徳永清行

道家の經濟思想……………經濟學士 穂積文雄

研 究

シュピイトホフの景氣理論の批判……………經濟學士 青山秀夫

下請制工業の國民經濟的意義……………經濟學士 田杉競

英國經濟學に於ける東洋社會の理論……………經濟學士 島恭彦

說 苑

貿易統計の新しい任務……………經濟學士 有田正三

アツシニア紙幣……………經濟學士 河野健二

附 錄

彙報・外國雜誌論題

我國經濟發達の特質に就て

堀江保藏

一 序 言

經濟新體制の當面の目標は生産の擴充にあり、而してその屬性として、又は之を實現する手段として、或は公益優先の理念が強調され、或はそれを現實化すべき組織が考へられ、或は生産技術の高度化の問題が論議せられ、或は企業のコ合・整理が熱心に考究せられてゐるやうに見える。此等の事柄を如何に處置すべきか、特に現存の生産力を落さずして所謂新體制を如何に實現すべきかは、最も慎重なる考慮を要するところであり、殊にそれが政治・經濟・國民道德の現狀に對する深き理解の基礎の上に考へられねばならぬことはいふ迄もないが、その現狀に對する理解を深めるためには、その歴史的考察を加へることは、無駄でないのみならず、頗る大切であらう。

本稿に於ては、右の諸點に關聯して我國經濟發達の二三の特質を考究しようと思ふ。從つて取扱ふ範圍は主として明治維新以後であり、特質と稱するも各國經濟發達との比較に於ける根本的特質ではなく、現象形態に現はれた二三の特徵的な事項を指摘するに止ることとなるであらうが、その點は豫め讀者の了解を願ふ次第である。

二 封建社會の構造的特質

資本家社會を考察するには、一應封建社會を顧みる必要がある。殊に我國の場合には、封建社會より直ちに比較的進んだ資本家社會に遷つたからである。封建社會特にその後期は、土地經濟の間に貨幣經濟が著しく發展した時代であり、商工業者の居住地たる都市が發展して、商人が經濟の上に優位を占むるに至つた時代である。この時代に歐羅巴に於ては所謂自治都市が成立し、土地經濟に基礎を置く封建領主との間に種々の關係が生じた。この關係につきビュツヒヤーは伊太利型・佛蘭西型及び獨逸型を掲げて次の如く説明してゐる。

『諸都市の、周圍の農村に對する經濟的支配は、獨逸に於ては、若干の場合に政治的支配にまで高まつたに過ぎぬ。伊太利に於ては、同様の發展は都市的專制の完成に導いた。佛蘭西に於ては、自由な都市團體の自治は未だ子供のうちに國王が封建貴族の助力を得て之を踏付けてしまつた。そこで獨逸に於ては佛蘭西に於けると同様に、都市の城壁外に存する總ての物は莊園法的構造によつて蔽はれてしまふことゝなつた。勿論大きな莊園領主は自己の莊園を親しく經營することをつくに斷念し、かくてその土地所有は、恰も都市の土地及家の所有が都市貴族に對するが如く、單なる地代の源泉となつた。けれども彼等の當初の經濟力は政治力となり莊園領主(Grundherren)は封建諸侯(Landesfürsten)となり、この變化の過程に於て細分せる新たな小貴族領主階級が成立した。そしてその利益は諸侯のそれと結びつき而も全く農業的利益であつた。かくて獨逸に於ては、中世後期を充たした所のかの鋭い抗爭が市民と貴族との間に起つた。そしてこの抗爭に於て、都市は大部分は購買及質流れによつて都市領主から獲得した政治的自治を固持したけれども、農民階級を封建的權力からもぎ取ることが出来なかつたのである。²⁾』

要するに伊太利に於ては都市の獨立の程度最も高く都市國家にまで發展し、獨逸都市は周圍の農村に對する政治的支配にまでは到らなかつたけれども、自身は諸侯及領主に對抗し得る政治及經濟力を持つた。之に對して佛蘭西に於ては都市は形式に於ても實質に於ても國王從つて中央政府の統制を受けた。ビュツヒヤーは觸れてゐないけれども、英國に於ても事情は同様であつた。³⁾但し英佛兩國に於ても都市が多少ともに自治都市として成立してゐたことは同一である。

- 1) その大なるものが即ち大選舉侯(der grosse Kurfürst)である。
- 2) Bücher, K.; Die Entstehung der Volkswirtschaft. I. Sammlung. 16. Aufl. S. 134.
- 3) 本位田博士、歐洲經濟史、112—113頁參照。

此等歐羅巴諸國の狀態と比較すると、江戸時代の都市は、經濟的にも況んや政治的にも封建的支配力から獨立して、自治權を獲得したとは豪もいへない狀態であつた。中世末期に堺・博多等の都市は自治都市にまで生長してあつたが、間もなく其等は封建的支配力の裡に包攝せられてしまつた。江戸時代の諸大名は既に Grundherren ではなく Landesherrn であつて、此點は獨逸の狀態と類似してゐるが、之と農民との間に或程度の經濟力・政治力を持つ Grundherren は介在せず、従つて當時に於ては都市も農村も一樣に封建諸侯の行政區域たるの形式と實質とを具へてゐた。尤もそれが近代的な行政區域と全く同一のものでなかつたのは勿論であつて、都市も農村も一面に於ては自治團體の性質を有しつつ、他面に於ては諸侯の強力な統制に服してゐたものであつて、いはゞその自治の許容は統制のための手段に外ならなかつたのである。

我國に於て封建諸侯と農民との間に莊園領主が介在しなかつたのは、當時武士が土地を離れて城下町に居住し、多分に俸給生活者的・官僚的性質を持つに至つたことと相關聯する。而して封建諸侯の利益は勿論農民の利益と最も密接に結びついたところであり、一方に於て誅求を取つたにしても、他方には農政に最大の努力が拂はれた。併し之と同時に諸侯と商人との關係も時代の経過と共に益々密接の度を加へた。蓋し貨幣經濟の進展に伴つて、諸侯は次第に商人の財力に依存しなければならなくなつたからであり、商人の側より見るも、商業資本の蓄積は諸侯と關係に於てなされるものが最も重要であつたからである。⁴⁾

従つて我國に於ては、他の多くの事情と相俟つて、佛蘭西革命の如き町人革命勃發の機運は醸成せられず、英國の名譽革命の如きものすら行はれ難い情勢にあつた。

要するに、我國封建社會末期の構造は、之を歐羅巴諸國の同時代のそれと比較すると、構成要素に於ては多く

4) 拙著、日本資本主義の成立、35頁以下。

の共通のものがあつたけれども、構成の仕方に於て著しく異なるものがあつた。その主要なる點は、都市が自治獨立性を持たなかつたこと、都市は農村と共に諸侯の行政區域であつたこと、武士が俸給生活者化し而も封建的身分關係が依然として根強く存したこと等であつて、要するに封建諸侯の政治的・經濟的支配が社會の隅々にまで行互り、而も幕府が諸侯の諸侯として全國的に統制してゐたのである。かくて三百年の永き平和が維持せられ、封建の秩序は形式上殆ど紊れずして明治維持に至り、茲に明治の新體制が樹立せられることになつたのである。

三 個人的利己主義

今日公益優先といふことが頻りに唱へられるのは、一つには個人的利己主義に基くが如き現象が隨所に現はれるからに外ならぬ。實をいへば政治・社會經濟の各方面に現はるゝ割據主義、平たく云へば出る杭の頭を直ぐ叩くといふやり方も、個人的利己主義と別物ではない。之は我國民性に内在する悪い特質の一であるかの如く唱へる向もあるが、私は歴史の過程に於て培はれたもの、従つて更に歴史過程を経ることによつて變じ得るものであると思ふ。

前述の如く我國の封建時代に於ては、封建諸侯の統制は政治・經濟其他各方面に及び、社會の隅々にまで及んでゐた。政治も經濟も諸侯を中心とし、諸侯のためのものであつた。その下に於て、先づ主要生産階級である農民は、土地に拘束せられ、居住移轉及び職業選擇の自由を持たなかつた。町人階級のうちには巨富を累ね、諸侯の命に必ずしも諾々として従はざるのみならず、諸侯をしてその前に膝を屈せしむる程權勢を持つたものもあるが、併し彼等の活動は封建的社會機構に拘束せられ、その生活は封建的秩序に従つて營まれねばならなかつた。

彼等の活動は更に仲間組合制度によつてその自由を妨げられた。之は商業者たると手工業者たるとを問はず各營業に關して結ばれたものであつて、そのうち官の許可によりその保護の下に一定種類の營業を獨占した株仲間が最も大きな存在であるが、官許のものたると否とを問はず、仲間外の同業者を排除すると同時に、仲間員相互間の自由競争をも排除する仕組みであつた。營業の安定といふ點からは都合のよい制度であつたが、創意の伸張といふ點からは窮屈な仕組みであつた。更に武士階級の間に於ても、身分格式が重んぜられ、人材の登用が極めて狭い範圍に於てしか行はれなかつたことは言を要せざるところである。

斯くの如く社會の各方面に於て個人の自由は認められなかつた。この秩序に従はざれば生存權を奪はれる。中にはそれすら覺悟で反抗することも行はれた。百姓一揆の如きはその典型的なものである。武士階級殊に下級武士の局面轉換の運動が尊皇攘夷運動となり、明治維新到來の重要な力となつたのも、一つには封建的な身分秩序への反抗が契機となつたものであつた。何れにしても封建社會の下に於ては、いつの時いづれの處かへ自己を主張せんとする強い欲求が動いてゐたのである。

かゝる際に西洋思想が輸入せられ、明治維新の成就と共に西洋流の個人的自由主義の理想が政治・經濟其他各方面に採用せられることになつた。官民共に、恰も待受けてゐたかの如く、この思想に飛付きこの理想を掲ぐるに至つたことは、上述の事情よりして直ちに察せられるであらう。

當時取入れられた西洋思想には、大體に於て、英國流の功利主義、佛蘭西流の自由民權主義、獨逸流の國家主義、米國流の基督教的博愛主義の四種類があり、夫々の特徴を備へてゐたが、そこには共通するところのものがあつた。それは個人の自由といふ點であつて、それが當時の我國民に最もアツピールしたのである。例へば獨逸

流の國家思想の紹介者である加藤弘之博士も、政府の職掌に就て極端なる自由放任主義と極端なる保護干渉主義との中庸をとつて、『都て臣民に任せて置て出来ることは、成丈け政府で手を出さず、唯臣民に任せて置て出来ることは、已むを得ず政府で世話をやくを本意と致すでござる』と述べて居られる。英國流の功利主義の最初の且つ且大の紹介者である福澤先生が、如何に個人の自由を主張されたかは、『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり』といふ有名な一句を以て始まる『學問のすゝめ』の一書を読むことによつても明かである。

尤も福澤先生は、個人の自由を主張する半面に個人の責任を強調せられた。之は同じ書物の隨所に書かれてゐるところであるが、試みにその一つを掲ぐれば左の如くである。

『學問をするには分限を知る事肝要なり。人の天然生れ附は、繋かれず縛られず、一人前の男は男、一人前の女は女にて、自由自在なる者なれども、唯自由自在とのみ唱へて分限を知らざれば、我儘放蕩に陥ること多し。即ち共分限とは、天の道理に基き人の情に従ひ、他人の妨を爲さずして、我一身の自由を達することなり。自由と我儘との界は、他人の妨を爲すと爲さざるとの間にあり』云々。

斯くの如く自由は責任を伴つて始めて主張し得るところである。然るにも拘らず當時の我國に於ては、經濟上の自由主義にしても政治上の自由民權思想にしても、自由の面のみを強調することに急であつた。之は當時外國に於て、自由主義思想がかゝる段階にまで發達して居り、而もそれが我國に直輸入せられたのによるところであつて、強いて輸入した人達の故意に歸したり、唱導した人達の罪に歸したりすることは出来ないものであるが、兎も角も個人的自由主義は、封建的社會秩序の抑壓下にあつた我國民に最も歡迎せられ、我國經濟發達の思想的裏付けとなつたのである。

6) 眞政大意(明治文化全集、第五卷)99頁。

7) 學問のすゝめ、初篇、4—5丁。

顧ふに西洋の自由主義思想は、永い發展の過程を辿つて右の段階に到達したものである。古代ギリシヤ及ローマに就ては暫く措くも、人間の自由といふことは十四・五世紀のルネッサンス以來強く叫ばれたところであつて、そこに於ては神學からの哲學の解放、教會からの俗人の解放、神中心的思想からの人間中心思想の解放等、要するに自然のまゝの人間の發見といふことが基調をなした。そして神から自らを解放した人間は、次に世俗界の絕對權者である國王の權力から自らを解放して、茲に利己活動の自然的結果が國家公共の利益に合致するといふが如き思想・行動にまで發展したのである。

右のルネッサンスの前に歴史的事實として、前述の自治都市の發達があつた。その獨立の程度は國により異つてゐたけれども、自治を認められたこと、並にギルドを主要構成部分としてゐたことは共通であつた。ギルドは江戸時代の株仲間と類似のものであるが、夫々の營業の獨占團體である外に、自治都市の構成部分であるといふ我國では見られない特性を持つてゐた。而して典型的意味に於ける中世都市は自給自足をその經濟生活の目標とし、あらゆる種類の手工業が營まれるやうな方策を講じた。従つて手工業者が養育する徒弟も、單に自己の補助者として之を養育するのでなく、その都市に於けるその職業の後繼者として養育したものである。換言すればギルドは政治的・經濟的等あらゆる方面より見て、都市なる共同社會の構成體であつて、そのメンバーは同時に市民であるといふ關係にあつた。而して彼等は自己の權利を主張すると同時に市民としての義務を重んじたのである。市民なる語が我國のそれと著しく内容を異にする所以は茲にある。

自己を主張すると同時に自己の責任を考へる、茲に個人的自由主義或はデモクラシーの本質がある。爾後宗教改革運動・絶對王政排除運動の過程に於て、責任の側は次第に忘れられ、殊に思想に於ては例へばベンサム の如

き、利己心の充分なる満足若くは發揮を以て道德の根本原理と考ふる者も現はるゝに至つたが、併し自治都市時代以來訓練せられたところは容易に消滅せず、特に獨逸に於ては、十九世紀初頭以來、民衆主義的な團體主義を以て國民の個性的なものと考へ⁸⁾、之を獨逸文化建設の理念としてその下に國民的訓練を行つて來たのである。

ところが自治都市時代を持たなかつた我國に於ては、市民的訓練の機會を與へられなかつた。その機會なきまゝで西洋のいはゞ爛熟期の個人的自由主義思想を輸入した。而もそれは政治的・經濟的要求と合致した。そして封建社會の根本的特徴の一つである割據主義を排除せず、却つて之を守り育てつゝ今日に至つたのである。

四 科學性の不足

ルネッサンスに於ける人間の發見は、同時に科學性の發見であつて、新興の市民階級は學問を教會から奪ひ、天文學・物理學・生理學等を科學的に研究し始め、その諸結果が一方に於て近世經濟發達の技術的基礎となつた。ところが我國に於てはかやうなことは起らなかつた。三枝氏は「日本人は自然を人間的に愛しながら、自然を認識的には愛しなかつた」と述べ、近世以前の日本技術史を科學なき技術史として特徴づけられる⁹⁾。至言といふべきであるが、それが科學性の缺如を以て我國民性の本來的特質の一つであるとするのでないことは勿論である。之を工業技術といふ狭い範圍に限つて考へても、近世以前の技術史は成程科學なき技術史であつたが、江戸時代殊にその後期には科學ある技術も現はれた。此事は色々の例をとつて説明することが出来るが、興味深きは幕末に洋式工業技術を取入れた頃の狀態である。當時の洋式工業技術は總て之を外國から取入れなければならなかつたことは勿論であるが、之をなすに當つてピンからキリまで外人技師に依頼したわけではなく、洋書を唯一の

8) 本位田博士、經濟史研究、5頁。

9) 三枝博音氏、技術史(現代日本文明史、第十四卷)14頁以下。

頼りとして日本人によつて精緻な機械が作られた例が多い。その一例は、嘉永初年島津齊彬侯が蘭學者箕作阮甫に蘭書「水蒸船説略」の翻譯を命じ、藩士はこの譯書に従つて直ちに小型の船用蒸汽機關を作製し、安政二年之を越通船に裝備して隅田川に試運轉を行つたことである。而して蒸汽機關の製造に成功した時に、造士館の助教横山安容は「書「水蒸船説略後」」といふ一文を綴つたが、その一節に次の如く述べられてゐる。

『試みに西夷をして之を視せしめば、彼れ將きにははんとす、東方人あり、機巧此の如し、果して徒に驍勇果毅のみにあらざるなり。乃ち彼れの氣、戰ずして而して先づ屈する者に非ざるか。吾れ聞く清國人之を言ふ。大廠の製は西夷より精なるはなし、其の用は西夷より習さるはなし、之を内地に製するよりは、之を外夷に購ふに如かずと。夫れ廠の小、猶ほ且つ之を製するを欲せず、況んや船の大なるものに於てをや。是れ初めより西夷の知慮、企て及ぶ可からずと爲すを以てのみ。宜なるかな前きに暎夷の屈辱する所となり、而して和を乞ひ以て儘か自から免れたり。所謂自ら侮て而して後ち人之を侮る者に清人あり。我れの今日、廠の製の用は精且つ習なり。之を西夷に較するに、過有りて而して不及なし。時に鎖國の典、外に事無かりしを以て、船の製造は未だ深く意を致さず、苟も以て通せざるを濟ふのみ。是を以て彼れの往來迅速出沒測り難きを見るや、人々或は未だ疑懼を免れざる者あり。今や説略の書出で、而して且つ運轉の機設施すべきを驗す。則ち天下の人をして、斷然西夷の伎能怪むに足る無きを知らしむ』¹⁰⁾

之は科學性を中心として日支兩國民の氣質を比較し、同時に銃砲の製造に於ては既に西洋に劣らざるものがあるに拘らず、造船に於て甚だ劣れるは、我國民が鎖國其他の事情によつて、訓練の機會に恵まれなかつたのであるものなることを指摘せるものである。

訓練の機會に恵まれず、科學性を發揮し得ないといふことは、人々の無氣力といふことと相關聯する。福澤先生は『抑も我國の人民に氣力なき其原因を尋るに、數千百年の古より、全國の權柄を政府の一手に握り、武備文學より工業商賣に至るまで、人間些末の事務と雖政府の關らざるものなく、人民は唯政府の嗾する所に向て奔走

するのみ』¹¹⁾と述べて居られるが、特に『倚らしむべし知らしむべからず』を以て政治の要諦とせる幕府時代に於ては、人々は無氣力とならざるを得なかつたのである。

幕末に至つて科學性發揮の機會を與へられ、維新後になるとこの機會は益々大となつた。然るにも拘らずそこには一定の限界が存し、人々をして相變らず無氣力ならしむる別の事情があつた。それは循環論的ではあるが、我國經濟發達の後進性といふことであつて、而も後進國のまゝでは先進列強の植民地化する危險あり、苟も之を免れんとすれば、我國の經濟を急速に資本主義化して、列國の水準に到達せしめなければならぬ事情にあつたのである。

かくて先づ着目せられたのは、西洋流の個人的自由主義思想と併せて西洋流の産業技術の移植であつた。詳言するまでもなく、明治の初め十年乃至十數年の間にあらゆる種類の工業技術が輸入せられ、之と共に頗る多數の技師があらゆる先進國から招聘せられた。而して當時は自由主義の華かな時代であつたから、技術も技術者も頗る容易に招聘することが出来た。茲に至る以前即ち十八世紀末から十九世紀初頭へかけての所謂産業革命時代には、英國はこの革命に於て率先せる利益を確保せんとして、新技術が海外に傳はることを極力阻止した。例へば紡績機械は勿論、その模型や設計圖も輸出すべからず、熟練工は海外に移住すべからずといふが如き法令を頻發した。このために例へば亞米利加等で新技術を移植せんとすれば、英國の熟練工が逃避して来るのを待つか、英國に赴いて新技術を盜取るかしなければならなかつたのであるが、¹²⁾我國の場合には事情は餘程異つてゐたのである。

斯くて前述の如く、機械も技術も之を外國に仰ぐ、或はパテントを買つてやつて行くといふのが、我國の從來

11) 學問のすゝめ、第五編、4丁。

12) 拙著、アメリカ經濟史概説、136頁。

の生産技術發展過程の特徴であつた。勿論之には例外もあつた。軍需品殊に武器艦船の生産技術はその最も顯著なものであり、平和産業にあつても例へば繊維工業用諸機械は、世界大戦後には、世界水準以上のものが造られた。併し一般的に見て技術の獨創には未だ〳〵距離があり、特に工作機械の製造に至つては頗る幼稚なるを免れなかつた。他方に於て技術者の養成といふ事は明治初年以來頗る留意せられ、そのために大學・専門學校が設けられた。併しこゝで養成せられた技術者は、技術創造のための技術者ではなくて技術運轉のための技術者であつた。極端な表現を用ふれば、企業家は外國から輸入した技術と國家其他の教育機關に於て養成された技術者とを結びつけて、いはゞ其日暮しの生産を行つて來たのである。企業自體が研究機關を設けるが如きことは近時に至つて始めて行はれ、而もそれが少數の大企業に限られたことは、右の事情を物語るものである。

斯くの如きやり方で兎も角も我國の生産技術は略々列國の水準に達することが出來た。列國の水準に達すれば、それ以上の進歩には獨創が絶対に必要となる。加ふるに世界大戦後各國共に容易に技術を公開しない時代に入つたため、此點からも獨創が要請される。今日科學の振興が重要問題となつてゐるのは、かゝる歴史的事情からであつて、決して場當りの、一時的の問題ではない。而して今日までのこの問題が輕視乃至無視されたのは、政府の罪でもなく、資本家の罪でもなく、實は我國經濟發達の後進性並にそれに基く急進性に伴ふ必然の結果であつたのである。併し兎も角もその事の故に所謂科學性を訓練し發揮すべき機會を殺がれたこと、從つて科學性發達の限界を劃されたことは事實であつたといはねばならぬ。

五 不均等狀態

維新後自由主義思想を取入れたことは、我國經濟の急速なる發達によつて頗る好都合であつた。何故ならば個

人的自由主義を完全に發揮させること、乃至は之を發揮し得るやうに制度・施設を整へることが、我國經濟を最もよく發達せしめる所以であつたからである。生産技術の輸入に就ても同様である。輸入によらざれば到底經濟の發達は期待せられなかつたからである。一言にして云へば、模倣による經濟の發達であつて、勿論模倣によつたとしても、之を短時日の間に我物とした點に、國民の獨創性を認めなければならぬけれども、模倣による發達であつたことは否定せられない。

そして之によつて我國經濟は僅々數十年の短日月の間に急速なる發展を遂げた。併しその過程に於て各種の不均等狀態が伴つた。屢々論ぜらるゝ農業部門と他の産業部門との間の不均等、勞働者と資本家との間の勢力關係の不均等、商工業に於ける大經營と中小經營との間の不均等、或は一般的に見て所謂財閥の經濟力の絶對的・相對的優位性などがそれである。併しこゝでは其等の點に觸れることを避けて、他の二三の點を述べようと思ふ。

その一つは、よい表現ではないが、科學性の不均等といふことである。前項に於て科學性といふことを生産技術に限つて考へた。併しこの問題は單に生産に科學的技術を應用するといふことに止まらず、企業經營を如何に合理化するか、生活全般を如何に計畫的に行ふか等、頗る廣い内容を持つてゐる。かゝる意味の科學性が我國民に頗る乏しいことは屢々指摘せられ、或は民度が低いといふ言葉で表現されてゐる。而も他方に於て生産技術は、模倣によつてはあつても、兎も角列國の水準にまで到達した。茲に科學性に於ける不均等狀態が現はれた。教育といへば學校教育以外のものを考へないのが通例であるやうに、科學といへば自然科學のことしか考へないといふのは、まさにこの不均等狀態を如實に示すものである。

今日科學性涵養の必要が叫ばれると同時に、數年前から引續き智育偏重の弊害が唱へられ、その矯正方策が考へられてゐる。之は矛盾である。智育偏重なる觀念は、智育を體育及德育と別のもの或は對立するものと思ふ

ところから生ずるものであつて、眞の意味の智育、科學性訓育の意味に於ける智育を考へるならば、かゝる觀念は生じない筈である。既に禁斷の木の實を食つた人間の、他の動物と異なる特質の一つは、知識を持つてゐるといふことである。眞の意味の知識に徹することによつて、徳育も體育も發達し、國民生活は全體として科學性を持ち、その基礎の上に生産技術の獨創的發展が行はれ得ると同時に、國民團體に於ける各自の自覺が生じ責任感が發揮されることになる、この點につき我々は福澤先生の「學問のすゝめ」を再讀する要があらう。

もう一つの點は我國經濟發達に於ける政治的指導の優位性、別の言葉で現はせば、國民大衆は概して無批判に政府の指導につき従つて歩みを續け、その間にギャツプ——悪い對立の意味でなく——が生じたといふことである。之は封建社會の傳統の一つであり、同時に維新後の發展過程に於ても、政治的指導が經濟の急速なる發達に與つて力ありしところからも生じた事柄である。官尊民卑の風が今尙ほ行はれ、政府と國民大衆とは對立物であるかの如く考へられ勝ちなのは、そのためである。

右のギャツプは大資本家と國民大衆との關係に移して考へることも出来る。日清戰爭以後の産業資本、世界大戰以後の金融資本の顯著なる發達、並にその政治への反映、而して之に對する批判が社會主義思想の立場からするものに限られたことによつて、右の事實を窺ふことが出来よう。換言すれば國民大衆は、大資本企業に自己の及ばざることを諦めるか、或は之に關知せざるか、若くは之を讃仰したのである。勿論大資本企業は我國經濟の發達のいはゞ直接の擔當者であつた。今日に於てもそれは異ならない。併し黙つてそれにつき従ふといふのでは、頻りに唱へらるゝ『盛上る力』にならないこと言ふ迄もない。

盛上つた政治的指導力並に大資本企業の力と未だ盛上つてゐない國民大衆の力との間の不均等、之も我國經濟發達過程に於ける不均等狀態の一つであつて、それが上述の科學性の不均等と相照應するものであること勿論で

ある。

六 結 語

以上に於て我國經濟の發達過程に現はれた二三の特質を述べた。個人的利己主義の横行、科學性の不足、各種の不均等狀態がそれであつて、要するに今日短所又は缺點と考へられてゐる點のみを歴史的に考察したのである。長所とすべき點に敢て觸れなかつたのは、他意あつての故でない。短所こそが今日如何に改善すべきか、重要な課題となつてゐるからである。而して價值判斷の上から見て、短所又は缺點として指摘される以上の諸點も、それは我國國民經濟乃至國民性に本質的に内在するものでなく、我國經濟發達の過程に於て、訓練の機會に恵まれざりしところより生じた事柄であること、之を私は強調しなかつたのである。

何故に訓練の機會に恵まれなかつたか、それは我國經濟發達の後進性及び之に基く急進性に歸着するのであるが、特に封建社會から直ちに資本家社會へ移つたこと、並にその封建社會の構造が列國のそれと頗る趣を異にしたことは、この後進性を特色づけるものであるやうに思はれる。冒頭に封建社會の構造的特質を掲げた所以は茲にある。換言すれば封建社會の傳統は、經濟發達の急進性の故に容易に掃除せられてゐないのである。嘗て我國經濟發達の特質として、日本資本主義は封建的・軍事的である點が掲げられ、封建的性質の内容としては資本主義經濟の據つて立つ基礎たる農村の社會關係が封建的である點が擧げられ、之に關して筆者も一文を草したが、併しこの問題と共に重要視すべきは、本稿に掲げた諸點ではないかと思ふ。

要するに封建時代より資本主義時代に發展して今日に至つた過程に於ける訓練の機會の缺如、或意味での溫室的發展の故に、今日、國民的自覺・獨創等への悩みを必然的に持たねばならない結果となつたのである。